多文化をあきなう

さをり織りで、記憶を紡ぐ、歴史を紡ぐ

東山高志（ひがしやまたかし）　ツナミクラフト代表

タイや日本の被災地で、女性たちが織る「さをり織り」。「ものづくり」や「あきない」を超えて、人びとの「記憶」まで織り込んでいくようである。そこにフェアトレードがくわわるとき、さらなる人と人との結びつきが生まれる。

さをり織りで心のケア

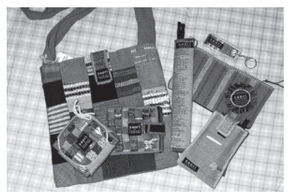
赤色、黄色、水色など、鮮やかな糸を手に取り、一〇人ほどの女性たちが風とおしのいい大きな屋根の下で楽しげに織り機に糸をとおしている。彼女たちは、二〇〇四年インド洋大津波の被災者である。笑顔にあふれる職場では、困難があったことなどみじんも感じない。

ここは「さをりセンター」。タイ南部の観光地プーケットから車で二時間離れた場所にある。さをり織りという日本を起源とする織物で、小物やバッグなどに加工をしている。さをり織りは今から四〇年ほど前に大阪の女性、城（じょう）みさを（一九一三―）が考案した現代手織りで、簡易な織機を用いて誰でも簡単に自由に織れるのが特徴だ。障害者が才能を発揮することが多く、趣味の世界だけでなく福祉の世界で普及している。

タイでは、一九九七年の「アジア太平洋障害者の十年」バンコク会議の展示で注目され、二〇〇二―二〇〇五年にJICA（国際協力機構）によりタイ北部にて知的障害者と山岳少数民族の雇用促進プロジェクトのなかで導入された。そのことを知ったあるタイ寺院の日本人住職光男ガヴェサコー師は、さをり織りに瞑想（めいそう）と同様の効果があることを見出し、自らの寺に研修用として導入した。その矢先に大津波が発生、被災者の「仕事がしたい」という声を聞き、津波から一か月後に約三〇〇〇人が避難している避難所内で心のケア事業として織り始めた。

ツナミクラフトは二〇〇五年一一月に活動を開始した任意団体で、心のケアの活動を維持するための日本での流通を担当している。現在はセンター外のスタッフを含めると総勢五〇名がさをり織りで働いている。津波で子どもを亡くしたある女性は「子どもを津波で亡くし自分を責めたこともあったが、ここにいけば仲間もいるし、織ることが楽しい。収入は多くはないが、子どもと暮らし、学校に通わせることができる」と言う。今、彼女は津波後に生まれた子どもと暮らしている。

タイの津波被災地にさをり織りを持ち込んだ、タイ寺院住職、光男ガヴェサコー師



津波後3年目の2007年のタイの作品

タイの津波被災地のさをり織りの織り手さん

タイの経験を日本へ

さをり織りによる心のケアと仕事づくりは東日本大震災の被災地でもおこなわれている。ツナミクラフトでは震災の一か月後から準備を始めた。支援活動の資金となるようにと「PRAY FOR JAPAN」と書かれた、さをり織りのリストバンドがタイの被災者の手により作られ日本に届けられた。

インド洋大津波の経験から不便な場所ほど支援が必要だと学んだので、岩手県沿岸部を活動地域と定めた。地元の被災自営業者などの協力をえて、二〇一一年一〇月にようやく第一回の体験会を開催できた。当時は会場の確保も難しく、偶然に会場を提供していただいた若者の就労支援施設が会場となった。そこを利用するいわゆるニートといわれる若者たちがいちはやく技術を覚え、仮設住宅を巡回する活動の戦力となった。支援される立場が支援する立場となり、若者たちは元気を取り戻し社会に巣立っていった。彼らの功績もあり、二〇一三年末現在で岩手県宮古市、山田町だけで一〇か所の自主サークルが出来た。

「織物をしていると、そのときだけ津波のことを忘れることができる。仲間と織ることがなによりも楽しい。生きがいです」と宮古市在住の女性が語る。紛争や災害によるPTSDの問題を研究している東京外国語大学非常勤講師イザンベール真美の現地調査によると、さをり織りを始めると症状が緩和される傾向がみられるという。

開始当初、材料は支援品を使用したが、収益のでる持続的な活動とするために、NPO法人さをりひろばなどとともに「SAORIAS」ブランドとオリジナル商品「まいっかちゃん」を企画した。これらの製品は、新しい三陸の特産品となることを目指して「道の駅やまだ」などで販売をおこなっている。

被災者とともに生きるために

日本人は、被災者、被災地に対して腫れ物にでも触るかのような対応をする傾向がある。筆者がタイの津波被災地に入った理由は風評被害の実態調査だった。タイの津波被災地に日本人観光客だけが戻らないという現象が発生したためだ。

フェアトレードの仕事のひとつは、さまざまな困難とともに暮らす人たちとの接点を作ることだと考えている。その活動の一環として、織物と写真を融合させた共同作業「Cruise around Tsunami Havens」を企画した。これは東日本大震災一〇〇〇日目から新しいことを始め、一〇年後、二〇年後に繋（つな）げようという企画である。二〇一三年一二月四日に岩手県、宮城県、福島県で合計一〇本のたて糸をつくり、さまざまな地域を巡回しながら、インド洋大津波一〇周年、阪神大震災二〇周年の日に完成を目指す。たて糸をその地に生き続ける人びとに見立て、そのたて糸によこ糸をとおすことで接点を設け記憶を紡ぎ、布となることで歴史を表現しようという試みである。

被災地で織物が受け入れられるのは、人類と織物の何千年もの歴史が、織ることを通じて被災者の心によみがえるからだろう。

読者にお勧めしたいことがある。ぜひ、手織りの体験をして欲しい。人間が人間として歴史を重ねて生きていることを体感できるかもしれないから。

被災者がつくったたて糸にさまざまな人がよこ糸を入れ、携わった人の写真を織り込んでいく。織りつなぎワークショップにて

仮設住宅の集会所での心のケアを目的とした、さをり織り普及活動。ひとつの仮設住宅に対し5週連続で実施し、指導者やボランティアが行かなくても活動できる自主活動サークルづくりを支援する

タイの津波被災者たちが日本の復興のために作った「PRAY FOR JAPAN」リストバンドと岩手の津波被災者たちの製品化第一号の「まいっかちゃん」